

満洲国におけるモンゴル人女子青年教育

——興安女子国民高等学校を中心として——

新保 敦子

はじめに

1. 興安省について
2. 清末から民国時期にかけての内モンゴル東部地域におけるモンゴル人の教育
3. 満洲国の教育
4. 興安女学院
5. 興安南省立興安実業女学校
6. 興安南省立興安女子国民高等学校
7. ドリグルマと興安女高

まとめ

キーワード：植民地教育、満洲国、モンゴル人、興安省、女子青年教育、女子国民高等学校

はじめに

本論の課題は、日本軍占領下の植民地、「満洲国」におけるモンゴル人女子青年教育の実態を明らかにすることにある⁽¹⁾。対象としては、満洲国下の興安南省に設立された省立興安女子国民高等学校を取り上げる。

興安地区は内モンゴル東部地域に位置し、満洲国の中でもモンゴル人が集中的に居住してい

た地域である。当時、学校教育を受けるモンゴル人児童が少ない中で、中等教育機関である興安女子高等学校は、モンゴル人の女子青年教育の上でエリート養成の重要な役割を果たしていた。

では、ここではいかなる教育が行われ、どのような学生を日本側は育てようとしたのだろうか。日本人の意図に対してモンゴル人女子青年たちは、何を考え学ぼうとしていたのか。本論では、当時の文献に加えて、関係者のメモやインタビューに基づきながら、学校が設立された経緯、教育内容、学生生活、教師と学生との関係など、その実態に迫ってきたい。

満洲国の教育史研究においては、戦後、60年以上が経過し、ここ10年ほどは資料集の出版など新しい動きが生まれている。しかし必ずしも十分な成果をあげている状況とは言えない⁽²⁾。たとえば満鉄附属地や関東州を中心とする地域は資料の整理が進んでおり、研究も進展が見られるものの、それ以外の地域は、研究の基礎となる資料の発掘さえも立ち後れているのではなからうか⁽³⁾。とりわけ、満洲国下の少数民族研

(1) 本来ならば、「満洲国」は傀儡政権であり、「」付けをすべきであるが、煩雑さをさけるため、以下では「」をつけずに記述する。

(2) 槻木瑞生「満洲教育史」教育史学会編『教育史研究の最前線』、日本図書センター、2007年、149－151頁。「満洲教育史研究のフロンティアーいま満洲教育史が直面している問題ー」『東アジア研究』、第44号、大阪経済法科大学アジア研究所、2006年、3－19頁。

(3) 「満洲国」教育史研究会『満洲・満洲国』教育史料集成』（全23巻、エムティ出版、1993年）。『満洲』植民地中国人用教科書集成』（全8巻、緑蔭書房、2005年）。竹中憲一『満洲』における教育の基礎的研究』（全6巻、柏書房、2000年）。竹中憲一『満洲』植民地日本語教科書集成』（全7巻、緑蔭書房、2002年）など。

究は未開拓の分野として残されている。その意味で、本論は一定の意義があると考えることができる。

本論の構成は以下の通りである。まず興安省について概観し、次に興安省が置かれた内モンゴル東部地域におけるモンゴル人教育の歩み、さらに満洲国建国後の教育制度を検討する。

また興安女子国民高等学校は、興安女学院、興安実業学校、興安女子国民高等学校という3つの段階を経て発展していったため、各段階における教育を明らかにしていく。最後に同校の卒業生であるドリグルマ女史（徳力格爾瑪、以下、人名については敬称略とする）について取り上げ、当時の学生が、占領下において何を考え、卒業後どのような歩みを辿っていくのかを考察したい。

1. 興安省について

内モンゴル東部地域には、古来、多数のモンゴル人が居住してきた。しかし清朝支配下において漢人の人口増大を背景として、漢人の移住が活発化した。牧畜を営むモンゴル人と農耕民族である漢人とは、根本的に利害が対立しており、漢人の開墾によってモンゴル民族は生活圏を犯されることになった。清朝はその弊害の

大きさから漢人の蒙地移住を禁止したにもかかわらず趨勢は押し留めることができなかった。また辛亥革命後、漢人による大規模な土地収奪が行われ、民族間の矛盾は激化した⁽⁴⁾。

こうした漢人とモンゴル人との民族対立の結果、民国時期にモンゴル人の蒙古独立運動が起こり、特に辛亥革命を契機とするの外蒙古独立（1911年）に触発されて活発化していた⁽⁵⁾。一方、関東軍は1931年に満洲事変を發動して中国東北部への侵略を開始し、その結果、満洲国が1932年に成立することになった⁽⁶⁾。その際、日本軍は「漢蒙両民族は互に相容れざるの歴史を有する」とし、こうした独立運動を巧みに利用しながら、内モンゴル東部地域を支配下に治め、満洲国の建国にあたった⁽⁷⁾。

ところで満洲国の西、モンゴル人が多数居住している内モンゴル東部地域とホロンバイルには、豊かな牧草地が広がっており、満洲国のモンゴル人の約6割が集住していた⁽⁸⁾。したがって、満洲国建国直後の1932年3月には、モンゴル人行政のため、特殊行政区域として興安省が設置され、中央に興安局という特別の官庁が置かれた（興安局は、後に興安総署から蒙政部へと再編）。興安省は、34年に興安東・南・西・北の各省に分かれた（興安東省、興安西省、興安南省は1943年に、興安総省へと統合）⁽⁹⁾。遊

(4) 米内山庸夫『蒙古及び蒙古人』、目黒書店、1943年、239-240頁。加藤六蔵編『蒙古事情』、満洲事情案内所、1940年、9-13頁。ラティモア著、後藤富男訳『満洲に於ける蒙古民族』、善隣協会、1934年、71-88頁。

(5) 財団法人善隣協会調査部編『蒙古大観』、改造社、1938年、241頁。吉田公平「満洲に於ける民族問題」『満蒙』、第20年12月号、満蒙社、1939年12月、38-56頁。

(6) 山室信一『キメラ満洲国の肖像-』、中公新書、1993年、330頁。

(7) 「漢蒙両民族は互に相容れざるの歴史を有するも、五族の中核たるべき日本人の熱烈なる指導により漸を追ひて融合提携せしめ以て有色人種の大同団結を促進す」。「蒙古民族指導の根本方針」（満洲国政府、昭和11年5月20日）『現代史資料』（満洲事変・続）、11、みすず書房、1965年、948頁。

(8) 「康德7年12月末現在（昭和15年）人口調査（國務院

興安局調査科編）」坂田修一編輯『興安蒙古』、満洲事情案内所発行、1943年、折り込み図表。「満洲の大部分は蒙人の土地である上、ここに居住する人口は106万人で一番多く（外蒙70万人、内蒙30万人、ソ連40万人、その他100万人）、いわば満洲は蒙古人にとって大切なふるさとと言える」（斎藤実俊「興安軍の壊滅」蘭星興安会私達の興安回想編集委員会「私達の興安回想」、蘭星興安会、1999年、55-58頁。

(9) 森久男「蒙古独立運動と満洲国興安省の成立」『現代中国』、73号、現代中国学会、1999年、102-111頁。興安省の行政は、以下の様に改編。1932年3月；興安局成立。同年8月；興安局が興安総署へ。1933年4月；興安総署の下に興安東・南・北分省。同年5月；西分省の成立。1934年；興安総署が蒙政部へ。興安東・南・北・西の各省の誕生。1943年；興安東・南・西各省が興安総省へ、省都は王爺廟（ナムスラジャップ＜名木ノ

牧民族であるモンゴル人の生活は漢人とは大きく異なるため、1932年11月に満洲国政府は「興安各省旗地保全ニ関スル件」を公布し、非開放蒙地での漢人の新規開墾を禁止し、モンゴル人の生活空間を保全しようとした⁽¹⁰⁾。また産業、経済、文化、教育の面で配慮し、税制、治安維持面でも特別の措置を執った。

満洲国内のモンゴル人は、1940年の統計によれば、約108万人程度で、満洲国の総人口約4,166万人の約2.5%に過ぎなかった⁽¹¹⁾。それにも拘らずこうしたモンゴル人に対する優遇政策を採ったのは、中国の支配下にある内モンゴルやロシアの強い後押しを受けて誕生した蒙古人民共和国に居住するモンゴル人工作の意味もあった。ただし、満洲国の建国後には、蒙古独立は蒙古自治へと格下げされていくのであった。

2. 清末から民国時期にかけての内モンゴル東部地域におけるモンゴル人の教育

清朝治下において、教育機関は官学や仏教寺院以外ほとんど無かった。モンゴル人は「学校教育に無縁のまま、10歳までには一人前の牧童

に成長し、モンゴル語であれ漢語であれ文字を読むことなく牧民として一生を終えるのが常であった」という⁽¹²⁾。これはモンゴル人を一定の限られた領域に封じ込め、漢人の先進的文化との接触を禁じた清朝による政策の結果でもあったと言える。

そのため、満洲国の報告によれば、「モンゴル人は満洲事変以前は、教育が全く無かった」とされている⁽¹³⁾。しかし、清末に漢人の内モンゴル進出が激しくなっただけから、モンゴル人と漢人の雑居地域に「寺小屋式の私塾も見られ、満・蒙・漢三ヶ国語の教科書を使っている教育が行われていた」のである⁽¹⁴⁾。

また、漢人の進出が著しい地域において、清末から近代教育に向けての取り組みが始まっていたことは注目に値しよう。その先駆者として、カラチン（ハラチンとも表記）右翼旗のグンサンノルブ王を挙げることができる⁽¹⁵⁾。

カラチン右翼旗は漢人の入植が進んでおり、王は危機感を募らせていた。一方、日本陸軍は、中国東北部をめぐるロシアと対立し、満洲に隣接していた内モンゴル東部地域のモンゴル貴族との接近を重要視していた。

ス來扎布>口述、包彦等整理「興安省の由来、演変及其組織機構」中国人民政治協商会議内蒙古自治区委員会文史資料委員会編『偽滿興安史料』（内蒙古文史資料第34輯）、内蒙古文史書店、1989年、8頁）。

また各省の人口は以下の通りである。西省763,701人、東省199,530人、南省1,026,635人、北省132,426人（「1940年臨時国勢調査」『満洲年鑑 昭和19年版』、32頁）。

興安省の成立については、①鈴木仁麗「満洲国興安省の初期統治構想とその転換—疆域問題からみた興安省の「特殊性」—」早稲田大学史学会『史観』、第155冊、2006年、56—75頁、②鈴木仁麗「満洲国建国期の東部内モンゴル政策—関東軍による政策決定過程とその初期理念—」『東洋学報』、第87巻第3号、東洋文庫、2005年、95—126頁、参照。

(10) 塚瀬進「満洲国—「民族協和」の実像—」、吉川弘文館、1998年、109—111頁。土地政策については、広川佐保『蒙地奉土—「満洲国」の土地政策—』、汲古書院、2005年、344頁、参照。

(11) 全国人口41,660,672人。その内、モンゴル人1,081,634

人。興安四省人口1,992,336人、モンゴル人627,563人。興安四省の中では興安南省に最も多くのモンゴル人が居住しており、その数は428,088人に上っていた。「康德7年12月末現在（昭和15年）人口調査（国務院興安局調査科編）」前掲『興安蒙古』。

(12) 白岩一彦「内蒙古における教育の歴史と現状」（中）『レファレンス』、531、国立国会図書館調査立法調査局、1995年4月、36—82頁。

(13) 文教部学務司編『満洲国少数民族教育事情』、1934年。武強主編、任興・趙家驥・沙宝祥副主編『東北淪陷十四年教育史料』、第2輯、吉林教育出版社、1993年、422頁収録。

(14) 前掲白岩論文、56—57頁。

(15) 内モンゴル・ジョスト盟の盟長でカラチン旗の札薩克群王でもあったグンサンノルブ（貢桑諾爾布）については、呉恩和、邢復礼「喀亜喇泌親王貢桑諾爾布」『内蒙古近現代王公録』（内蒙古文史資料第32輯）、中国人民政治協商会議内蒙古自治区委員会文史資料委員会編、1988年、1—29頁、参照。

こうした中、義和団事件後にカラチン右翼旗では、日本をモデルとして近代学校教育を導入しようとする動きが起こってきた⁽¹⁶⁾。グンサンノルブ王は、カラチン旗の王府付近に、軍事学校（守正武学堂〈通称は武備学堂〉、1902年）、小学校（崇正学堂、1902年）、女学校（毓正女学堂、1903年）等の近代学校を創設し、日本人教習を招いた。武備学堂では、陸軍歩兵大尉伊藤柳太郎及び元軍人の吉原四郎が指導に当たった。また毓正女学堂では河原操子が2年間、教鞭をとり、その後任として鳥居きみ子が招聘された。鳥居の夫の鳥居龍蔵も崇正学堂で男子生徒を指導した。

ところで毓正女学堂設立の経緯は以下の通りである⁽¹⁷⁾。グンサンノルブ王は1903年、大阪で開催された第5回国内勸業博覧会に参加した。その折りに、東京実践女学校校長の下田歌子と会見して女子教育の重要性を認識し、女子教育機関の設立に向けて取り組むことになった。教師として派遣されたのは、河原操子である。河原は下田歌子の勧めで横浜の大同学校での教職を経て、1902年には上海の務本女学堂の教師となっていた。その後、同郷の福島安正少将の推挙でカラチンへ向かった。

毓正女学堂は、1903年12月に開設された。学生数は約60名で、14-17歳の女子青年を中心と

していた。3学級編成で、月から金まで各5時間、土曜は2時間の週27時間、授業を行った。

設立当初は女子教育への反対が多かったが、次第に理解が深まり学生が増えた。河原によれば学生の日本語は優秀であったが、数学、地理歴史は不得意であったという。河原は女学での教育の他に園遊会、講話会などを開催し、多くの人々が参加して盛況であった。河原は1906年に帰国する際、3名のモンゴル人の少女（13歳から15歳）を伴ったが、彼女たちは日本に留学した最初のモンゴル人となった。

3. 満洲国の教育

(1) 新学制の制定

満洲国の建国後、満洲国側の資料では初等教育は順調に伸張したとされている。たとえば初等学校についてみれば、1932年に学校数11,595校、生徒数662,795人であった所、1942年には、それぞれ21,940校、2,159,864人に増加したと報告されている⁽¹⁸⁾。

また初等教育の就学率は、1935年に平均23%（興安各省のモンゴル人を除外）であったが⁽¹⁹⁾、その後、1937年に男子41.65%、女子15.52%、合計30.24%へと伸張している⁽²⁰⁾。

満洲国の建国後、当初は民国時期以来の教育

(16) 前掲白岩論文、62頁。

(17) 河原操子『カラチン王妃と私』、芙蓉書房、1969年、305頁。その他、毓正女学については、以下を参照。

① 小軍「二十世紀初頭における内モンゴル東部地区の教育事情に関する一考察－ハラチン旗の学校建設を事例に－」（国際シンポジウム・グローバリゼーションの下での少数民族女性のエンパワーメント実行委員会『グローバリゼーションの下での少数民族女性のエンパワーメント』、チヨダクレス 2007年、299-305頁）、
② 娜琳高娃「蒙古族第一所近代女子学校－毓正女学堂－」『興安女高』、内蒙古人民出版社、2005年、199-216頁。
②では河原のことを、スパイという役回りを果たした点を断罪すると同時に、近代学校教育の導入に尽力した点を評価している。

また河原操子と共に日本に留学した3人のモンゴル

女子学生の写真が残されている（「河原操子女史と蒙古女学生」『教育界』、第5巻第5号、1906年3月。近代アジア教育史研究会『近代日本のアジア教育認識・資料編』、第12巻中国の部(4)、龍溪書房、2002年、222頁収録）。

(18) 「初等学校累年比較表（公私立）」『大満洲帝国年鑑』。武強主編『東北淪陥十四年教育史料』、第1輯、吉林教育出版社、1989年、63頁。

(19) 『第四次満洲帝国文教年鑑』前掲『東北淪陥十四年教育史料』、第1輯、409頁。同統計によれば、ハルビン特別市：36%、奉天省：35%、興安南省：41%（ただし漢族のみ）、である。

(20) 皆川豊治『満洲国の教育』（建国読本第六編）、満洲帝国教育会、1939年、151頁。

制度を踏襲していたが、新しい学制が1937年に公布され、38年より施行された。

新学制によれば、初等教育機関として、国民学校（4年）、国民優級学校（2年）、中等教育機関として国民高等学校（4年）、さらに高等教育機関として大学（3年、もしくは4年）という教育制度が採られるようになった。

新学制の導入は、「国是の特殊性に基づき、真に国民教育の徹底を期せんがため」に「根本的に改革」することを目的としていたとされている⁽²¹⁾。改革の要点としては、第1に、国民精神の徹底的体得、第2に国民としての責務を果たし得る知識技能の修得、第3は体力の増進、であった。

しかし新学制は次のような問題点を含むものであった。第1に、精神教育の重視である。各種学校において道德教育が重視された。また日本語を必修科目とするとともに、従来の「国文」（中文）が「満語」とされ、中国人に対して日本人へ同化を迫るものとなった。

第2に、中等教育及び高等教育の年限の縮小である。新学制によれば、初等教育は6年で変化は無いが、中学校はもともと中高合わせて6年であったのが4年に、高等教育は4年から3年となった。満洲事変前よりも合計で3年短縮され、当時の日本の制度と比べると5年も短くなった⁽²²⁾。植民地支配下において、中等教育及び高等教育が軽視されたことを象徴的に示している。

第3に、中等教育段階での職業教育の重視で

ある。中等教育機関である国民高等学校は、高等教育機関への進学準備教育ではなく、あくまでも実務教育を中心とすることになったのである⁽²³⁾。

(2) モンゴル人の教育

もともとモンゴル人の教育は清朝の政策の結果、立ち後れており、初等教育機関は数少なく、「蒙古人の中等教育機関としては、奉天の東北蒙旗師範とチチハル蒙旗私立師範しかない」とされていた⁽²⁴⁾。

また満洲国建国後、興安総署における初期調査では、初等学校は、1934年に75校、教師183人、学生3,588人に過ぎなかった⁽²⁵⁾。さらに、モンゴル人の人口と比べると、小学生は3.5ミリパーセント、中学生は0.1ミリパーセントに過ぎなかったという⁽²⁶⁾。

教育普及が遅れている興安省では、モンゴル人の教育に対して様々な施策が採られた。その背景として、興安地域は国境地帯でありながら衛生状態の悪さから人口が希薄であり、その改善のためにも教育の普及が重視されたのである⁽²⁷⁾。

こうして、各旗・各県で小学校が最低1箇所建設されることになった。さらに1937年より、蒙旗教育振興助成費が認められ、初・中等学校の新設、就学督励に努力が払われた。

その結果、『満洲国現勢』（1939年版）によれば、興安南省において国民学校（4年制初等教

(21)『満洲 康德8年版』、満洲新聞社、1940年12月、239頁。

(22)主編王野平、副主編滕健・黃利群『東北十四年教育史』、吉林教育出版社、1989年、63-66頁。「蒙古族教育史」中国少数民族教育史編委編『中国少数民族教育史』、第2巻、雲南教育出版社、広西教育出版社、広東教育出版社、1998年、87頁。

(23)前掲『満洲 康德8年版』、244頁。

(24)前掲『満洲国の教育』、181-184頁。前掲『満洲国少数民族教育事情』（『東北淪陷十四年教育史料』、第2輯、422-425頁収録。）

(25)《内蒙古教育志》編委会編『内蒙古教育史志資料』、1-上、内蒙古大学出版社、1995年、133頁。原載は『赤峰事情』、1937年。

(26)建国後、小学校79所、学生3860人、教師280人。中学校は2校だけで、学生総数は300人。モンゴル人の人口に対しては、万分の1-2に過ぎないとしている（前掲『満洲国少数民族教育事情』）。

(27)ヴェルタア・ハイシヒ著、楊井克巳訳「興安蒙古における教育・衛生指導」『蒙古』、1941年9月号、善隣協会、50-59頁。

育機関) 140所、15,433人、国民優級学校(国民学校卒業生を対象、2年制初等教育機関) 28校、2,334人、国民学舎(国民学校の設置が困難な地域に設立。修業年限は1-3年の簡便な初等教育機関) 82所、3,526人、国民義塾(私立の国民学舎。私塾に相当) 92所、2,682人へとそれぞれ増加した⁽²⁸⁾。

一方、中等教育によって実務を担う中堅を育成することが目指された。そのため、興安南省の省都である王爺廟に中等教育機関が創設された。たとえば1935年に興安学院が開設された。興安学院はモンゴル人の中堅分子の養成を目的としており、一般中等学校とは別の体系で、国費により賄われていた。中学校への進学者が少ない中で、中学校への進学者はエリートと言えよう。さらに1941年には教員養成のため、師道学校(2年)が建設された⁽²⁹⁾。

王爺廟にはその他、興安軍官学校もあった。同軍官学校は、満洲国に設置されたモンゴル人のための士官学校で、卒業後は満洲軍の下で興安軍を組織していた。学生の中には、一部日本人もいた。

同軍官学校は、興安南省警備軍初代の軍事顧問金川耕作大尉の働きかけで、1934年に鄭家屯に設立され、1935年に王爺廟へ移転した⁽³⁰⁾。金川は、1932年に興安軍事教官として蒙古部隊の

指導に当たった人物であり、1933年より興安南省警備軍の創設に伴い興安軍初代の軍事顧問に任ぜられていた(敗戦後にソ連に抑留され、1950年にイルクーツクで病没)。

王爺廟には、この他に警察学校、興安医学院や小学校も何カ所もあり、モンゴル人の民族教育に力が注がれていた⁽³¹⁾。

4. 興安女学院

(1) 設立の経緯

以下は、『興安女高』に記載されたソブド(索布多、1期生、元内蒙古教育学院副教授)の論文に依拠しながら、その他の史料で補足しつつ述べていきたい⁽³²⁾。

興安女学院は、後に興安実業女学校、さらに興安女子国民高等学校という3段階を経て発展した。毓正女学堂を除外すれば、早い段階に設立されたモンゴル人の女子教育機関である。

もともと興安女学院は、金川耕作大尉の発案で設立された教育機関である⁽³³⁾。

金川は蒙古社会の振興のための教育と衛生を、口ぐせのように強調していたと言う。そのため、1936年3月、金川の指導で通遼の軍事部病院がモンゴル人の看護婦生徒6名を募集した。看護教育は寺子屋式に徳永文子婦長(松山市出身)

(28) 満洲国通信社出版部『満洲国現勢』(1939年版)、235頁。初等教育機関の種類については前掲『満洲年鑑 昭和19年版』、246頁。

(29) 38年に蒙民習芸所、39年に育成学院(4年)ができた(「科右前旗中学教育」前掲『内蒙古教育史志資料』、1-下、658頁。原載は『科爾沁右翼前旗志』第六篇〈文化・教育〉)。

(30) 「金川顧問は昭和7年4月、興安軍事教官に任ぜられ、蒙古部隊の指導に当たった。昭和8年興安南省警備軍の創設に伴い興安軍初代の軍事顧問に任ぜられた。昭和9年には鄭家屯に興安軍官学校を設立し、特務機関長を勤務した。……日蓮宗派に属し、法華経を極め、石原莞爾將軍を尊敬していた。昭和13年に蒙古忠魂塔を建立後、日本に赴任したが、野田顧問がノモンハン事件にて負傷したため、昭和14年8月に第9軍管区顧問に復帰した。敗戦後ソ連に抑留され、昭和25年12月

30日イルクーツクで病没。行年59歳。会津藩士の血を引く金川の墓碑は、会津若松にある(戒能伍郎「興安軍略史」前掲『私達の興安回想』、20-21頁)。

また、興安軍官学校については、前掲『蒙古大観』、266-270頁、参照。さらに満洲国下における軍官学校については、鈴木健一「満洲国における日系軍官養成問題-新京軍官学校を中心に-」『古稀記念満洲教育史論集』、2000年、山崎印刷出版部、227-244頁、参照(原載は、『近畿大学教育論叢』、第10巻第2号、1999年1月、35-49頁)。

(31) ソブド(索布多)「回顧興安女子国民高等学校建校と発展歷程」ソブド主編『興安女高』、内蒙古人民出版社、2005年、1-16頁。以下、特に断らない場合には、本論文からの引用である。

(32) 前掲ソブド論文、1-16頁。

(33) 前掲戒能論文、19頁。

が担当し、起居を共にしての教育が行われたという。当時、モンゴル人女子青年は門外不出で募集が非常に困難であり、ある意味で画期的なものであった。

こうした看護婦教育をきっかけとして、次に、興安女学院が、1937年に通遼に創設された。金川以外にも、興安南警備軍指令部のモンゴル人の中に参謀長のナチンションホル（那欽双和爾）のように、女子青年への教育機会の提供に賛同する者がいたため、参謀のドグルジャップ（都固爾扎布）が、開設工作に協力した⁽³⁴⁾。

満洲国において軍隊が設立に関与した学校は、ほとんど類例が無いが、当該校はモンゴルの軍官、官僚のために文化教養のある良妻賢母を育成することが目的であったと言われている。開学式典の際に通遼県県長は「王爺廟には興安軍官学校があり、今回、興安女学院ができ大変に良い」と述べたことが、建学の目的を示しているとソブドは指摘する。興安実業女学校で教鞭をとった山根も、「興安軍（蒙古兵）の将校夫人等の所謂インテリ女性を育成する目的で、特に日本人式の大和撫子（大和魂）を吹き込んでほしいと申し入れがあった」とメモを残している⁽³⁵⁾。

学校名については紆余曲折があった。初め日本人は、花嫁女学院にしようとした。しかし中国にはこの種の学校が無く、「モンゴル人の女子青年たちは、こうした学校名を聴くと恥ずかしく、嫌悪感を抱いた」⁽³⁶⁾。そのため、学校名を興安女学院にしたという。

学校は設立されたものの、モンゴル人や日本人からも「モンゴル女性に教育は必要無い」といった反対があった。当時はモンゴル女性の90%以上が非識字者であり、ごく少数の上層階級だけが文化知識を有していた。またモンゴル人

の場合、散在する小さな部落に居住していたため、学校で学ぶためには、寄宿舎に居住する必要があった⁽³⁷⁾。しかしながらモンゴル人は封建的思想の影響で、一般に女兒や女子青年を勉強のために寄宿させることはなかった。さらに当時は初等教育さえも普及しておらず、中等教育機関である興安女学院への入学者は極めて少なかったという事情もある。そのため自発的入学者はおらず、強制的に各旗ごとに割り当てて派遣させた。こうしてホルチン（科爾沁）左翼后旗が2名、ホルチン左翼前旗が4名を派遣し、さらに10数名の軍人の家族及びその他が加わり、第1期の学生となった。

学院は通遼のはずれの静かな場所にあった。校舎は中国人家屋を改造した粗末なもので、日本人院長・舎監の宿舍、教員の宿舍兼事務室、台所・食堂、教室及び学生宿舍など5間があった。

学費、生活費などは、すべて免除で条件は非常に恵まれていたにも関わらず、学生は多くなかった。2回の学生募集で、ようやく学生は20名あまりとなった。

学生の年齢はまちまちで、10歳を少し過ぎたばかりの者もいれば、17-8歳の者もいた。教育程度もばらばらで、非識字者もいれば、小学校2-3年レベル、あるいは4-5年レベルもいた。

ソブドは1期生であったが、ホルチン左翼前旗（賓図王旗）からの推薦で来ていた。年齢は13歳で、小学校6年生であった。彼女と一緒に来た1期生には、包明月、包瑞蘭がいた。第二期の中には、包丕蘭、包明風がいた。ソブドは、「私たちは皆初めて家を離れ、初めて汽車に乗り、初めて電灯を見、初めて都市に入り、すべてが新鮮であった。各旗・県から来ている女子

(34)前掲ソブド論文、2頁。

(35)山根メモ。

(36)前掲ソブド論文、2頁。

(37)民生部教育司編『満洲国教育概況』、満洲帝国教育会、1942年、126-127頁。前掲『「満洲・満洲国」教育史料集成』5、教育要覧類II、774-775頁収録。

青年の生活は、共に学び助け合い、快適であった。しかし時には学校の困難な生活に適應できない、と思うこともあった。学生宿舎は日本式の畳で10数名が一緒に住んでいた。食べるものは、トウモロコシのちまき、コーリャン飯、じゃがいも白菜炒め、という質素なものであった。学校の規律は比較的厳しく、平時は外出が許されず、用事がある時だけ、舎監に許可を得て初めて外出できた」と述べている⁽³⁸⁾。

教育内容は主に①文化課（数学、蒙語文、日語文）、②技芸課（裁縫、編み物、調理）、③文明礼儀を中心としていた。当初、女子学生たちは、日本語がわからなかったが、基本的に授業はすべて日本語によって教授されていた。授業の時、聞き取れない場合でも、そのまま進んだ。日常生活では通訳がついた。

ところでソブドは、在学期間中、印象深いことが2つあった。第1に日直をストライキしたことである。学生は、順番で日直を担当することになっていた。仕事としては教室の掃除、寄宿舎の清掃があった。その上、日直は「家政実習」の名目で日本人舎監の小谷家で保母や掃除、炊事をしなければならず、上手にできないと叱責を受けたが、これには我慢ならなかった。こうした不合理な制度に不満であったため、ある日、学生たちは抗議のストライキをして日直当番となっても家政実習をしないことにした。学校には、「我々は学習に来たのであり、ボランティアのためではない。こうした制度を廃止しないのであれば家に帰る」と抗議した。学生たちの態度が断固としたものであったので、学校側は家政実習を取りやめた。学生たちは勝利を歓び、授業に戻った。

第2は、クラスでのお見合いである。ある日、日本語の授業を受けていた時、教員でもあったドグルジャップが2-3人のモンゴル人の軍官

を率いてきた。聴講に来たと言っていたが、実際には、花嫁候補を見に来たのであった。お相手はクラスの級長である王であった。男性側のお相手は、包であった。おそらく、事前に通知されていたのであろう、堂本は王を指名して朗読させ、日本語を披露させた。王はこのお見合いで、結婚することになった。ソブドたちは年齢が小さかったので、こうした事情がよくわからず、奇妙に思った。そこで笑い話に仕立て悪ふざけに包をまねて劇を演じて、王を居心地悪くさせていた。

当時、女学院では良妻賢母の育成を趣旨としており、これが女性の天職であるとしていた。王は軍人の妻になり、またその他の学生の何人かも卒業後、軍人の妻になった。しかし彼女達は良妻賢母になっただけでなく、日本敗戦から中華人民共和国建国後にかけて、革命幹部にもなった。日本人が意図したような家庭だけを守っているような従順な良妻賢母にはならなかったのである。

(2) 教 員

興安女学院は軍隊が設立した学校のため、学院の院長、教師、職員は、司令部の日本軍人及び彼らの夫人が兼任した。名誉院長は、満洲興安南警備軍参謀長・ナチンションホル夫人の名金玉であったが、徳永雄一参謀長が院長を兼任し、当初、徳永夫人が舎監となった。また専門教員として2名の日本人がいた。小谷栄一と堂本修である。小谷栄一は大阪外語(蒙古語科)卒業で、モンゴル語が堪能であり通訳を兼ねていた。堂本修は、明石女子師範出身で神戸から招いた⁽³⁹⁾。

蒙語文はモンゴル語で教えられた。授業を担当したのは、小谷であり、軍官のドグルジャップも、蒙語文教師を兼任していた。技芸課は、

(38)前掲ソブド論文、4頁。

(39)山根メモ及び前掲戒能論文、19頁。

徳永参謀長夫人、大沢副官夫人、戒能夫人ら軍人の妻たちが指導した⁽⁴⁰⁾。これは技術の訓練が主で、また編物、洋裁、調理も習い、女子学生は毛糸の靴下、セーター編みや簡単な被服制作もできるようになった。学生たちが最も喜んだのは調理であり、作った料理をおいしく食べた。指導者たちは授業が終わると帰っていったため、気持ちの上での交流も無かったとソブドは述べている。

最も多く接したのは、日本人の女性教師の堂本修である。彼女は数学、日本語、音楽課を担当し、教材も自編した。堂本は、極めて熱心に授業を行い、重要な点や難しいポイントを反復的に教授し、わかるまで説明してくれた上、日本ファシストを讃えることはなかったとソブドは記述している。

また、堂本は性格が穏和であり態度が優しく、学生のことを熱愛していたという。舎監として朝から夜まで学生と食事、体操、労働、寝食を共にし、学生との接触が非常に多く影響力も大きかった⁽⁴¹⁾。たとえば夜に1-2度起きて学生達のふとんをかけるなど、親身に世話をした。また、堂本自身の生活は貧しかったが、病気の学生のために薬を飲ませて看病した。家庭が困難な学生が休みに家に帰るお金が無いときには、乏しい月給の中から交通費を出していた。

堂本の父親は早くに世を去り、母が働いて子ども達を育てた。家は貧しく、大学に行けなかったのも、経費のかからない師範学校に進学した。彼女が満洲国に来て教師となったのは、老母を養うためであった。当時の日本においては、裕福な家庭の女性は女学校に進学し、早めに嫁ぐのが一般的であった。一方、成績が優秀であり

ながら家庭が貧しい女子青年たちの中には、師範学校に進学する者が少なからずいた。こうした師範学校卒業生にとって、教師となり教鞭を執ることは、生計を支えることと共に、一つの自己実現の道でもあったと考えられる。

堂本は生活費を儉約しながら、毎月、母に送金していた。母親は非識字者であったが、娘と手紙をやりとりするため、独学で文字を学び手紙を書けるようになった。堂本は、毎日、母親に手紙を書いていた⁽⁴²⁾。いつも母親から手紙が来ると、飛びあがらなばかりに喜び、学生たちも堂本を囲んで、「お母さんはお元気ですか？何が書いてあるのですか？」と聞いた。堂本の影響を受け、学生たちは、次第に堂本の母親に心を寄せるようになったのである。

堂本の熱心な教育のおかげで、学習は次第に軌道に乗った。日本語の日常用語を修得し、短文を書けるようになり、日本語で簡単な劇も演じることができるようになった。堂本は授業の時に発音が正確であるように厳しく要求した。そのため、堂本に指導を受けた学生は日本語が非常に良くてきた。3期生のドリグルマは1990年にフフホト市の商業代表团として日本を訪問した際、通訳も兼ねたが、日本語が標準的でモンゴル人とはわからないと言われたという⁽⁴³⁾。

堂本の提案によって生徒は制服を着用することになった。制服の上衣は紺色の海軍服、下はスカートであった。制服は、戒能夫人が指導して生徒に手縫いさせて仕上げたという⁽⁴⁴⁾。モンゴル人の女子青年が制服を着用するのは、この時が初めてであった。また髪の毛は皆おかっぱにした。こうして学生たちは農村の土臭い娘から面目を新たにした。また堂本は学生たちに簡

(40)前掲戒能論文、19-20頁。

(41)「興安南省訓令第502号」前掲『内蒙古教育史資料』、1-上、316-317頁。原載は、『興安南省公報』、第21号、1938年9月20日。舎監は、寄宿舎・食堂の秩序の維持、寄宿舎などの衛生、寄宿制の健康増進、寄宿制の日常生活礼儀及び規律の訓練、課外生活の指導を行

うとある。

(42)ドリグルマ(徳力格爾瑪)「回憶興安女高的三年」前掲『興安女高』、62-69頁。

(43)前掲ドリグルマ論文、63頁。

(44)前掲戒能論文、20頁。

単な日本の和服を作ったが、学生たちはこれを
着て特に喜んだらしい。

堂本と女子学生たちが一緒に撮影した写真が『興安女高』に掲載されているが、「あの時代に共に学び生活した教師と生徒の深い情愛の真実が映し出されている」と、ソブドは記している⁽⁴⁵⁾。後日談であるが、当時の女子学生たちと堂本は、1987年と1991年にフフホトで再会を遂げることになる。当時の女子学生たちは、熱烈に歓迎したとの回想が『興安女高』には残されている（堂本は1993年に逝去）。

5. 興安南省立興安実業女学校

興安女学院は、軍隊が学校を維持するのは困難ということから1938年4月に興安南省へ移管され、校名も興安南省立興安実業女学校となった。学制も2年と規定されることになり、軍人及び軍人の妻による教育がなくなった。小谷、堂本の両先生は23名の学生を連れて通遼から興安南省の省都の王爺廟に移り、新しい学校で生活を開始した。

王爺廟は、もともと人口4,000人の小さな街であった（現在のウランホト市）。その後、1935年に省都として定められ、興安南省公署などの行政機関の他、興安学院、興安陸軍軍官学校などが置かれ、興安地区の政治、軍事、経済、文化の中心となっていた⁽⁴⁶⁾。

しかし当時は、「新京から汽車で14時間かかり、1日1回しか汽車が通らず」、うら寂しい所であった。「街には子豚が子犬の様にぶらぶらして居り、朝は鶏の鳴き声ではなく小隊の泣き声で目をさました」という⁽⁴⁷⁾。

学校は王爺廟興隆街に設置されたが、街には

道路が1本しかなく、学校は荒涼とした僻地にあった。新しい学校は、臨時に民家を借りたものであった。校門はあったが部屋はぼろで。夏には雨漏りが冬にはすきま風が吹きこんでいた。教室2室、事務室と、台所兼食堂があった。冬には教室にストーブが置かれていたものの、寒くて授業中手が凍えて文字が書けず、足は痛いほどであった。学校の条件は劣悪で苦しく、特に都会から来た女子学生には耐え難かったようである。

「興安南省立興安実業女学校康德7年度入学学生募集要項」によれば、「1学級50人を募集（蒙古系に限定）。入学資格は、学費を納めることができる者、国民優級学校卒業あるいは、同等以上の学力と認められるもの。成績が特に優秀な場合には、国民学校卒業でも入学が許可される。応募者が募集定員を超えた場合には、選考を行う。2月中旬、入学予定」とされている。在学中は全員が寄宿舎に居住することになっていた⁽⁴⁸⁾。

入学資格として、学費を納めることができる者となっていたが、学生は、蒙民厚生会の学生補助金で、学費5.5元、寄宿舎77元、衣服30元、教科書5元、旅行費11元、実習材料費10元、学友会費2元の経費を全て賄うことができた。つまり、学費・生活費だけでなく、教科書、制服（夏・冬）、実習材料、学用品なども無償であり、学生は優遇されていた。

また、僻地で生活条件が厳しいため募集定員を満たしておらず、入学試験は免除された。それでも次第に学生は増加し、授業はレベルに応じて2クラス編成で行われていた。『満洲帝国学事要覧』（1940年）によれば、学生数は1年生50名、2年生26名とされている⁽⁴⁹⁾。

(45)前掲ソブド論文、6頁。

(46)「興安南省簡況」前掲『偽滿興安史料』、13頁。

(47)山根メモ。

(48)「偽滿興安省立興安実業女学校康德7年度入学学生

募集要項」前掲『内蒙古教育史志資料』、2、455-456頁。原載は『興安南省公報』、第59号、1939年10月。

(49)前掲『内蒙古教育史志資料』、1-下、660頁。原載は『満洲帝国学事要覧』、1940年9月、76-77頁。

カリキュラムとしては、1年時に国民道德(2)、算術(7)、モンゴル語(5)、満語(5)、日本語(10)、図画(1)、音楽(1)、家事(1)、裁縫(2)、手芸(4)、園芸(2)、体育(2)、以上合計週40時間を学んだ。園芸は、花卉蔬菜栽培、家畜の飼育を内容としていた。また2年時では、国民道德(2)、算術(7)、モンゴル語(4)、満語(4)、日語(10)、図画(1)、音楽(1)、家事(3)、裁縫(2)、手芸(2)、園芸(2)、体育(2)、合計週40時であった⁽⁵⁰⁾。2年になると、蒙古語、満語の時数が減少し、家事が増加している。全体としては、日本語の時間数が多いこと、また女子に対する実務的訓練を重視して、家事、裁縫、手芸の時間数が多いことが、カリキュラムの特色である。

教職員は、2人から11人に増加した(名誉校長はモンゴル人)。内訳はモンゴル人2人、漢人3人、日本人6人であった。小谷は主に教学工作を担い、堂本は数学、音楽、日本語を教えた。モンゴル語はタスシャブ(塔斯紹布)が漢語は王桂馥がそれぞれ担当した⁽⁵¹⁾。

山根喜美子は1939年3月、京都府立女子専門学校を卒業した。「当時の満洲国(興安軍)の募集で、一番日本人の少ない土地を希望して、モンゴル語を全然知らないまま単身、1939年に赴任し」⁽⁵²⁾、踊りと家事を教えた。

山根によれば、モンゴル語・漢語以外の科目はすべて日本語で教授されていたが、「約3ヶ月でお互いの意志が通じるようになり、2カ年で当時の高等小学卒業の学力を身につける事ができ、日本各地(富山、山梨等)の女子師範に留学させた」とある。そのほか、長岡女子師範、

福島女子師範、松本女子師範、など師範系の学校に留学した者が少なからずいた。

堂本、山根については、当時、満洲日日新聞にも紹介されている⁽⁵³⁾。記事によれば、堂本は、一度、日本に帰国したが、女子学生の真情溢れる手紙をもらって、再び戻ったという。

6. 興安南省立興安女子国民高等学校

興安南省立興安実業女学校は、興安地帯における女子教育の殿堂として強化され、1941年4月に、興安南省立興安女子国民高等学校に改められることになった。

「女子国民高等学校令」によれば、女子国民高等学校の目的は、「国民道德の涵養、特に婦徳を重視し、国民精神を修練し、身体を鍛え、女子に必要とされる知識・技能を授け、労働の習慣を養い、良妻賢母を養成すること」(一条)にあるとされた⁽⁵⁴⁾。また「修業年限は4年」(七条)で、入学資格は「国民優級学校卒業者または年齢満13歳以上でそれと同等の学力を持つ者」であった(1938年1月1日より施行)。

女子国民高等学校は数が少なく、特に興安南省立興安女子国民高等学校は、初めて興安南省に設立された女子国民高等学校である⁽⁵⁵⁾。その後1941年度の調査によれば、興安南省に、省立女子国民高等学校は2校となっているが、同校は一貫してモンゴル女子青年の中堅層を養成する教育機関として、重要な役割を担っていたのである⁽⁵⁶⁾。

当初、興安女子国民高等学校の学制は3年で

(50)『偽滿興安省立興安実業女学校学則』前掲『内蒙古教育史志資料』、2、454頁。原載は『興安南省公報』、第42号、1939年。

(51)ドリグルマはモンゴル語担当教師を包先生としている。

(52)山根メモ。

(53)『満洲日日新聞』、2127号(1939年12月12日)、2128号(1939年12月13日)。

(54)前掲『東北淪陷十四年教育史料』、第1輯、531頁。

(55)『中等程度以上各種教育施設一覧』、1941年度(6月1日現在)、民生部、33頁。

(56)2校の省立女子国民高等学校の教員数は13人、学生数は223人とされている(前掲『満洲国現勢』(1943年版)、225頁。「全国公私立各種中等学校数表」(1941年12月調査)『満洲年鑑 昭和19年版』、247-248頁。後に、興安東省の扎蘭屯、興安北省の海拉爾、興安西省の開魯に女子国民高等学校が開設された(前掲ドリグルマ論文、62頁)。

あった。入学試験を導入し、新しく1クラス41人の学生を募集したので、3学年、3クラス編成となり、学生は96名となった。

校長は黒柳秀雄という日本人であり、モンゴル語を理解した。教職員24名中、モンゴル人の教師6人、漢人教師4人、日本人教師11人、職員3人であった。校舎として王爺廟の鉄道のわきに3棟の平屋が新しく建設された。校長室、事務室、総務室、教務室、教室、舎監室、学生宿舍、台所などがあった。しかし学校には塀が無かったため、ある深夜に泥棒が学生宿舍に押し入り、学生たちが大騒ぎした。学校の周囲には人家が無く、列車の汽笛以外何も聞こえず、夜にはオオカミの声さえ聞こえた。

学校の東側には畑を作り、ジャガイモ、白菜などの野菜を育て、学生に労働を教える基地とするとともに学生食堂の食事を補った。学生宿舍は、菊寮と蘭寮とに分かれ清潔であった。2列のベッドの間に机と椅子があり、夜間の自習や食事の時に使った。夜の就寝前に舎監の教師が来て点呼し、その日の総括（規律遵守、衛生）を行い、10時に消灯となった。学校の規律は比較的厳格で、平時には外出できず、用事があるときには休暇を申請しなければならなかった。日曜の外出は門限があり、外泊は不可だった。

カリキュラムも全面的に整備され、国民道德、モンゴル語、日本語、数学、物理、化学、生理衛生、地理、歴史、体育、音楽、家事（料理、裁縫）、勤労奉仕、礼儀作法などの科目があり、国家規定の統一教材を使用した。

ちなみに満洲国における「女子国民高等学校規定」（1937年）では、たとえば1年生の場合、国民道德(2)、国語(満語3、日語6)、地理歴史(4)、数学(3)、理科(4)、実業(実習・講義、2)、家事(実習・講義、各2づつで4)、裁縫手芸(手工も含む、5)、図画(1)、音楽(2)、体育(2)、

合計週に38時間と定められていた⁽⁵⁷⁾。ただし興安女子国民高等学校の場合、満語(漢語)にかわってモンゴル語が教授されたと考えることができる。

学校は一定の規模に発展したが、教学設備は皆無で授業時に教師には、1冊の本、黒板、チョークがあるだけであった。物理、化学、生理衛生は、黒板に図を描き授業を行った。音楽・体育教師の指導の下、女子バレーボール隊、鼓笛隊が組織された。各種の活動には制服着用で参加し、鼓笛隊のパレードは壮観で社会各界の注目を集めていた。

当時、教師の中に大学卒業生も少なからずおり、教育の質も向上した。ちなみに、山根は創立当時のような少人数教育ができなくなったので同校を辞職し、撫順の日本人女学校に移ったという。

1942年に興安女子国民高等学校は、正規の4年制普通中学となり、入試で53名の新入生を迎えた。またモンゴル人の教員を養成するため、1943年に1年制の師道科を付設したが、学生数は10数名であった。

当時は同校の最も発展していた時期であった。学生の資質においても明らかな変化が生まれた。在校生は4学年、4クラス150名ほどで、すでに、民族の特性を生かしたモンゴル人の女子学校となっていた。

1944年の春、日本に留学していたモンゴル人女子青年が卒業して帰国後、同校で教鞭を執った。その中に、ソブド、洪巨成、博丕栄、鳥松高娃らがいた。

ソブドらは日本でモンゴル人が亡国の奴隷となった恥辱を痛感し、祖国や民族が弱ければ、国外でも蔑視されることを認識した。そのため、「モンゴル人の振興をはかり、祖国の強大化に自分の青春とエネルギーを傾けること」が共通

(57)「女子国民高等学校規定」前掲『東北淪陥十四年教

育史料』、第1輯、546頁。

の願いであった⁽⁵⁸⁾。

彼女たちは帰国して母校の発展を見て心から喜ぶとともに、自分の民族から人材を養成し、モンゴル民族文化を振興しようと思い、教師人生のスタートを切った、という。

ソブドは1年生の日本語と舎監を担当した。また授業を通じて民族を愛し、モンゴル人の振興のため学習に邁進するように学生を導いた。民族の言語、文字を学び、ジンギスカン出生の歌を歌い、学生の民族感情を呼び起こさせるように努力したのだった。

当時、ソブドの心の中にはジンギスカンがいて、蒙古人民共和国に行きたいと思っていたし、時には学生を連れてジンギスカン廟（1944年に建設、王爺廟北山）に参拝することもあった。この頃になると食料も不足しがちで、また勤労働員も増えていった。

興安女子国民高等学校は、1945年8月のソ連軍の満洲国への侵攻と日本軍の敗戦によって、その短い歴史を閉じることになった⁽⁵⁹⁾。しかしながら、同校で養成された女子青年達は、その後の内モンゴル現代史の中で教員、研究者、医者、軍人、官僚などとして、様々な面で目覚ましい活躍をすることになった。

7. ドリグルマと興安女高

ドリグルマは、1926年、ジリム盟ホルチン左翼后旗ジールガラ（吉爾嘎朗）の新興地主の家庭に生まれた⁽⁶⁰⁾。幼少時に2年間、私塾で学んだ後、次兄とともに故郷を離れて王爺廟に来て、王爺廟第三小学校で学んだ。その当時、紺色の海軍式の制服着用の興安実業女学校の女

学生に憧れ、1938年に同校に入学した⁽⁶¹⁾。しかし正式な学生ではなく、1年間の予備教育のあと、試験で正式な学生になるかどうか決まることになっていた。試験の結果次第では退学しなければならなかったため、日夜苦学した。学校は毎晩10時に消灯と決められていたが、ふとんの中で懐中電灯で勉強を続け深夜になってからようやく休んだ。1年あまりの学習で追いつき、1939年に正規の学生になることができた。

ドリグルマにとって、興安女高で学んだ3年間の思い出はいろいろある。まず日本語週である。日本語週に学生は日本語しか話してはならず、漢語やモンゴル語を話すと罰金が課せられた。教室や宿舎には箱が置いてあり、漢語やモンゴル語を話すたびに、銅銭をいれなければならなかった。学生たちはこれが不満で、自分たちを亡国奴にしていると思った。しかし日本語だけを話すというのは実質的に不可能で、日本語週は効果がなかったという別の卒業生の回想もある⁽⁶²⁾。

ドリグルマが最も嫌だったのは、3度の食事の度に、手を合わせて日本の天皇へ感謝の気持ちを唱えなければならないことであった。また教師は定期的に学生を神社に連れて行き参拝させたが、ドリグルマは心の中では、ジンギスカンに対して祈禱をし、モンゴル人が発展を遂げ、自分の民族の主人公になることを願ったという。

神社に参拝したために、神殿の中には何があるのか、疑問に思った。好奇心からある日曜日、一人で王爺廟の北山に行き、王爺廟神社（天照大神・明治天皇が祭神）⁽⁶³⁾の神殿の前で、周囲に誰もいないことを確認して、大胆にも神殿に入った。しかし、鋤に近い鉄器があるだけで、

(58)前掲ソブド論文、10頁。

(59)興安省は、ソ連軍による日本の引き揚げ者の大量虐殺である葛根廟事件が発生した地域である。

(60)ドリグルマ『坎坷歷程幸福晚年』、1995年、44頁。

(61)前掲ドリグルマ論文、62頁。

(62)沙蘭「歳月中抹不去的記憶」前掲『興安女高』、178

頁。都市部出身の学生の中には、モンゴル人でありながら、モンゴル語も、日本語も話せない学生がいた。彼女たちは、いつも中国語を話していたという。

(63)『満洲年鑑 昭和19年版』、満洲日日新聞社、1943年、267頁。

その他は何もなかった。すぐに外に出たが、神社を管理している日本人が来たので、臨機応変に銅銭を取り出し、拝んでいるように装った。日本人は神殿の中に入ったことを疑ったが、手の中の銭を見せ賽銭を入れようとしていたと説明して、その場を逃れた。心の知れた同級生に話した所、「神社の中は誰も入ってはいけない所。特に外国人は発見されれば捕らえられ、重い者は処刑される」と言われた。

ドリグルマは在学中、興安学院、興安軍官学校、師道学校の数人の仲間と秘密会議を開き、どのようにモンゴル民族の復興を図るかを相談したことがあった。集会の時には、ジンギスカン像を机の上に飾り、自分たちの決意の程を表した。

当時、学校では日本語通訳の試験を学生に受験させ、合格できれば日本に留学できた。ドリグルマは留学したいと思っていたし、教師やクラスメートも勧めた。しかし、通訳になることに反感を持ち受験しなかった。

卒業後、ドリグルマは1942年に瀋陽第二女子国民高等学校の4年生に編入した。同校はカリキュラムが揃った学校で内容も高度であった。彼女はクラスの中で日本語が一番だったが、数学は不得意で友人や先生方の助けでどうにか卒業できた。卒業後、南満医科大学を受験した。しかし政治のテストで、「最も崇拝しているのは誰か」という問題があり、日本の天皇と書くべき所、ジンギスカンと書いた。そのため思想不良で不合格となった。「モンゴル人が自分の祖先を崇拝できずに外国の天皇を崇拝しろというのか」と思い、反日思想はさらに強固なものとなったという。

翌年、再び医科大学の受験を目指した。医者となってモンゴル人のために病気を治療し、民族の振興に貢献したいと考えていたためである。1年間の補習の後、日本の九州帝国大学医学部への入学が許可され出国を準備していた。しか

し「アメリカが九州を爆撃している」と兄から止められ留学をやめた。

1945年に興安総省では開魯女子国民高等学校を開設することになり、モンゴル語と音楽の教師を募集していたので応募し、臨時教員として採用された。しかし半年もたない時期に時局は一層混迷を深め、実家に帰宅した。帰宅する際、汽車は日本の軍人と彼らの家族の引き揚げ用となり、中国人は乗車できなかったため、兄に馬車で連れ帰ってもらった。

1945年の8月15日に日本は無条件降伏をした。その後、ドリグルマは内モンゴル人民革命青年団（後に中国新民主主義青年団と改称）に参加した。1946年にモンゴル人の青年活動家として将来が囑望されていたトブシンと結婚、1947年、夫婦共に中国共産党に加入した。同年、ドリグルマは王爺廟で開催された内モンゴル第一回人民代表大会（自治政府予備会議）の時に参議員に選ばれた。その後、トブシンと共に興安盟扎賚特旗で土地改革を行い、扎賚特旗音徳爾区の初めての女区長となった。

中華人民共和国建国後は、内モンゴル婦聯常任委員会委員・宣伝部長、中国共産党内モンゴル党委員会婦女委員などを歴任した。ドリグルマだけでなく、興安女子国民高等学校出身の学生は、1945年の日本への勝利、さらに1949年の中華人民共和国建国後も、各界で重要な役割を担っていった。

しかしながら、付言すれば、内モンゴルは文化大革命の嵐が吹き荒れた地域であった。多数のモンゴル人の幹部が内モンゴル人民党の活動に関わり独立工作を行ったという理由で、虐待され命を失った。ドリグルマの夫のトブシンも反右派闘争の時に右派と断定され、文革中には牢獄に入れられるなど、文化大革命終結までの約20年にわたって不遇の日々を送った。ドリグルマも、夫のトブシンが右派とされたため、文革中に迫害された。その後、肅正の動きが収ま

り名誉回復したドリグルマは、再びフフホト市第四毛織物紡績工場長・党委員会書記、フフホト市外国貿易局及び商業局局长、同党委員会書記、中国共産党フフホト市委員会第五期委員、市政協協商會議常任委員などの要職を歴任し、1986年に退職している⁽⁶⁴⁾。

ま と め

興安女子国民高等学校は、1937年、興安女学院として満洲国通遼に創設されたモンゴル人女子青年の教育機関である。興安女学院は、興安南省警備軍の軍事顧問であった金川耕作大尉の発案で設立された。1938年になると同校は興安南省に移管され興安実業女学校となり、通遼から王爺廟に移転した。さらに1941年に同校は興安女子国民高等学校となり、興安地区を代表する女子国民高等学校として学生数も増え発展を遂げた。

日本側としては、当初、興安軍官学校のモンゴル人士官の妻になるような良妻賢母の育成を目的としていた。その後、名称を変更し組織を改編したものの、その本質は変わらなかった。

しかしモンゴル人女子青年達は日本側の意向に決して従順だったわけではなかった。日本の軍事支配下にありながらもモンゴル民族の復興を強く願い、その力を蓄えるために勉学に真剣に取り組んでいた。表面的には日本人に従っていたが、不合理と思われることには抗議することもあったし、秘密裏にモンゴル人青年たちで集会を開催したりもした。

こうして同校で養成された多くのモンゴル人女子青年は、1945年の日本敗戦後に民族振興への強い思いを抱いて革命運動に積極的に参加し、中華人民共和国の建国に尽力した。さらに1949年の中華人民共和国建国後には、内モンゴルの建設の上で力を発揮し、内モンゴル女性運動の

先駆者となったのである。

また植民地における教育実践は、被支配者に対して支配者への同化を迫るものとして、否定すべきものである。興安女子国民高等学校においても、日本の統治者側はモンゴル人女子青年をあくまでも植民地支配の道具として利用しようとしたに過ぎなかった。

ただし、日本の植民地下にありながら、モンゴル人の女子青年の教育に親身に当たった堂本修や山根喜美子のような女性教師がいたこと、そして女子学生との間に人間と人間との深い交流があったことを、同時に指摘しておきたいと思う。堂本や山根は、約50年の歳月を経た後、内モンゴルのフフホトを再び訪れ、当時の女子学生たちと再会を果たした。多くの関係者が集まり大歓迎されたという。世話になった教師のことを終始忘れずに記憶に留めていたモンゴル女性たちの温かさとともに、教師と学生との真摯な交流は、数十年の歳月を経ても人々の心に灯をともし続けることを、興安女子国民高等学校の実践は教えてくれるのではなかろうか。

本論は資料の制約もあり、興安女高に関する初歩的な研究に留まっているが、今後、女子学生の卒業後の進路や人民共和国建国後の軌跡などを含めて、さらに研究を深めていきたいと考える。

追記

本稿の執筆にあたっては、ドリグルマ女史、その夫君であるトブシン先生に貴重な資料の提供とともに、数回にわたるインタビューの機会を与えて頂いた。また槻木瑞生先生は山根喜美子関連資料を提供して下さいました。これらの資料が無ければ、本論文は執筆されることが無かったであろう。3人の方々に心から謝意を表明したい。

(64)「興安女高一部卒業生経歴」前掲『興安女高』、241頁。